

平成 21 年 8 月 1 日発行
第 143 号

康寿診報

編集 / 発行 医療法人社団 康寿会 加藤内科医院

〒421-0301 静岡県榛原郡吉田町住吉 303-1

Tel: (0548)32-0701 緊急用:090-1758-1712 Fax: (0548)32-1280

「実質的な“Communication”を望む -七夕の前日 地域医療懇談会を省みて分析すると-」

“質”を考^きえ、毅然とした言動、後退せぬ責任 その (榛原病院問題について)

現場には現実が存在し、人と金が動いている。そして医療の問題は、素人の地方自治のトップが、現場の専門家と相談も無く、けりを付け仕切って交渉できる甘い世界ではない。浜松医大の内科以外の医局員が残った中で、営利優先の度合いが大きいと思われる医療法人、彼らが送り込む内科医が「開拓できる環境」を、議論の場を持たない行政が創れる状況は無い。本筋は「230億円の総負債に対し特例債の発行」等の策を急ぐべき。しかし今「禿げ鷹の餌食」になるのを見守る状況。忍び難いが冷静に見届け、今出来ることを、限られた時間で最大限にする。

平成 21 年 6 月 1 日発行 康寿診報 第 141 号 P1 より抜粋

7/6 七夕の前日 地域医療懇談会の会場 榛原医師会館へ向う車の中、運転中の私に 父 康二は「榛原病院医師会で運営したら...」と話してきた。「医師として開業し、良き時代を生き、第一線を退き、時代背景を考えない、80歳になる長老の考えること」と話した。

私は、康寿診報 第 141 号で“禿げ鷹”と罵り、失礼千万な事を言った。「口は旨い」「商売である」は事実であろう。ただしこの懇談会の中では、榛原病院に対し、仕事であるから当然と考えるのが妥当であろうが、未来エフピー 増村章仁氏に「不気味なエネルギー」を感じ、省みた。特に「Communication Skill」が足りなかった」の一言で済ませる話術には恐れ入った。さらに、私が最後に質問するまでは、行政側は現在の負債については一切触れなかった。そして、最後は“ぶちのめされ”、ネガティブな気持ちになった。

完全に足元をみられた状況下での交渉である。病院の管理責任者 牧之原市長の“禿げ鷹に託す”気持ち、「民間に縋る」姿勢」この甘い綺麗事は叶わない。

責任回避の吉田町「住民に対して」正確な情報が伝わらない状況、そして医療の現場この地域の現実を直視する姿勢を欠いたまま 無料化をはじめ「薬物中毒」にも似た「甘い方向に時流を進めながら票集めだけは怠らない」姿勢。政治家として、バランスを失った恥ずべき行為だと思う。しかも 誰も訂正出来な

い。最後は町が破滅する。皆さんは、この前段階に今いることを如何様に考えるか？ 町長が“聞く耳を持たない”ことが、榛原病院の破綻から、市町の財政破綻という惨事に直結する。数カ月で今の“責任の擦り合い”状態から“情報の隠蔽”の上に『臭い物には蓋』的に“無視・無策”であった行政に、社会的制裁が入り公表され、「地域住民に負に還元」される。

榛原病院問題、目線を変えて禿げ鷹そして入札を窺う医療法人の立場から考えると「行政が責任転換をしている状況を請け負うこと」である。行政側が“ヤバさ”を知り尽くした上で「十分な譲歩を取り付けてからでなければ手を付けない」というのが、定石であろう。行政が甘い、禿げ鷹は商売である。よって解決は先送り、最悪の状態、誰も手を付けられない。今の状態は、即刻「閉鎖」という現実を迫られ、行政が何度も懇願しても、禿げ鷹は動かないであろう。いや動かない社会情勢が待ち受けているように思える。そこまで、現在の医療経営情勢は厳しい。

国も榛南地区も、政治が混沌とし落ち着かない中で、多くの悲劇が待ち受けている。「政策を司る者の罷り通ろうとする世界」この訂正を当事者がする気が無ければ、今の先に未来は無い。最終段階に突入、何も出来ない。“無力”“無念”を思い知る。破滅後の世の存在を信じ、冷静に見届け、後退しない。 加藤寿夫